
銀色と紫色

邪餽 珀磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色と紫色

【Nコード】

N5403D

【作者名】

邪餽 珀磨

【あらすじ】

あの闘いから約10年。月神キールは、アルテミス・きら・夜王——アルと名乗って、再びあの街に帰って来た。『生きた証』の続編です。主旨が逸れてしまうかもしれませんが、暖かい目で見守って戴けると有り難いです。感想・評価・誤字脱字等の注意。なんでもいいので、皆さんの声をお聞かせ下さい。m（　）m

1の話：別れ↓始まり（前書き）

始めですので、短めになっております。

1の話：別れ↓始まり

「アイツ等、オレが死んだと思ってんだろおな」

「そうだな・・・って、もう行くのか？」

燦々と降る雪の中、傷付いた身体を起こしながら紫色のそいつは言う。

銀色のそいつも笑って答えた。

が、銀色の方は別れを惜しむように起き上がった。

「ああ。まあ、明日のことはワイルドハーフ獣人族にも分からない――」

「生きてたら、また逢おう”・・・だろ？」

紫色のそいつは、ああ・・・、と相槌を打ち、白い景色の中へと消えていった。

それから約10年。

その街に再び帰って来た紫色のそいつは、『死んだ』と思っている『アイツ等』にバレないように髪を染め、瞳の色を変え（カラコン）、偽名を名乗っていた。

そいつの名は、”アルテミス・きら・夜王”。
通称『アル』。

本名、”月神キール”。コウモリの獣人族である。

【動物園】

そこに、アルはいた。

昔、闘ったことのある奴等の檻の前に佇んでいた。

百獣の王・ライオンである。

彼等もまた、獣人族であった。闘いに敗れ、『月』の力によって獣人族としての記憶と能力を0に戻されたのである。

「楽しいか？」

その質問に答えるように、ライオン達はそれぞれ吼え叫んだ。

「そうか・・・」

そう呟いたアルの顔には、笑みが薄らと見えていた。

1度、空を仰ぎ見て、アルはその足を踏み出した。『情報屋』の
仕事を開始するために・・・。

1の話：別れ↓始まり（後書き）

始まりました
続・『生きた証』！！
わっているので次に閲覧する時は、ご注意ください（↑△↓●）
タイトルが変

2の話：始まり↓展開（前書き）

遅くなりました
がくいました

今回は長く、
分かりやすくするのに時間

すみませんでしたm（

m

2の話：始まり↓展開

10年前とは随分変わった街並み。だが、変わっていないものもあり、どこか懐かしい気分になる街。

黒いニット帽、薔薇の絵柄の付いた眼帯、ジャケットに銀のピアス、銀のクロスハーツ。ほぼ黒で身を包んで、アルはクリスマス間近の街並みを歩いていた。

目立つといえれば目立つが、この時期だ……。みくんな浮かれて気になどしていない。

「つとお。ここらにすつか……」

アルは足を止め、目の前の公園に目を付けた。

アルが見つけた公園にはでっかいクリスマスツリーが飾られていた。

「ここは……変わったなあ」

そう呟き、辺りを見回す。

ここはかつて、アイツ等と共に彼等を倒した場所。彼等の暴走を止めた場所。アイツ等と別れを告げた場所。かつて空き地だった場所……。

耳を澄ませば、平和的な子供達のはしゃぐ声。

犬と人間の話し声。

「げっ！」

知ってる顔にアルは息を呑む。どんなに姿を替えても、バレる奴にはバレるのだ。

アルは獣人族。だが、ハーフだ。（※【生きた証】参照）

心の『匂い』を解放して、普通の人間のふりをする。こうすればバレる心配も無い。

その犬と人間は、何も知らないままアルの目の前を通り過ぎる。

どうやら、近くの広場に用があるらしい。

小さくなる後ろ姿に胸を撫で降ろす。

バレなかった・・・。

と思いきや、犬が人間を待たせてアルの下へとテトテと歩いて行った。薄く笑う犬の表情からして、バレていたようだ。

「生きてたか？キール」

「お前もな。銀星」

腐れ縁というやつだろうか……。この2人が出会うのはこれで3度目だ。

見つめ合う2人は笑い合った。懐かしい光景に、懐かしい気分になったのが面白可笑しかったのだ。

「キール・・・」

「いや、今は『アルテミス・きら・夜王』だ。長いから『アル』でいいぜ」

「・・・そうか。では、アル。何故お前はここにいるんだ？」

「ある獣人族からの情報でな、アイツが普通犬になったんだって？」

淡々と話し、銀星はアルの情報に溜息を吐く。

確かに今、獣人族ではなくなった者がいる。そいつは10年前に共に闘った1匹でもあった。

銀星は、未だに能力の戻らないそいつとアルの情報網に、思わず吐いてしまったのである。

「・・・まさか・・・」

「ああ！顔を拝みたくなっとな！」

銀星の嫌な予感は当たった。

再び溜息を吐く銀星を横目に、それに・・・、と言葉を続ける。

「オレの寿命も近いみたいでな」

「そうか」

暫くの間が空き、ただ一言、銀星は納得したように呟いた。その予想外の反応に、アルはただ苦笑した。

「じゃ、俺はカオルと散歩だから・・・」

「ああ。また、逢えるといいな」

【SIDEータケット】

サルサが言葉を話さなくなって10年が過ぎた。そして、今でもまだあの頃のままだ。

言葉は無いけど、あの頃と日常生活は変わってない。全く・・・毎日、毎日疲れるよ・・・。

ああ・・・。

また呼び出した・・・。

「なんだよサルサ。いくら、今日が休みだからって・・・。分かった、分かった。散歩だろ？さ、行くぞ」

今いるのは病院。ここが今住んでいる所だ。

兄貴はいない。今から2年くらい前に、漸く毬愛さんと所帯を持つようになったからだ。

兄貴がいけないということは、俺を面倒見る必要がなくなったからで・・・。えっと、俺も一人前になったという訳で・・・。

はい・・・獣医です。

ウオウ！と元気に返事をしたサルサにリードを付けて、散歩に出掛ける仕度をする。

何かを感じたのか、俺とリードを引き離しサルサは玄関に向かって走りだした。こういう時は大抵、美也ちゃんが来たとか、銀星が

来たとかなんだけど……。この時はどこか様子が変わった。

「あ、おいっ！サル……。サ……」

俺がサルサに追い付いた時には、サルサは外にいた。

玄関には、俺とサルサともう1人……。

黒一色に身を包んだ、俺と同じくらいの年の青年。綺麗な顔立ちで、俺よりも大人びていて。

その人は、俺とサルサを見ていた。黙ったまま……。ずっと――

「あ、あのお……。？」

「……。。」

声を掛けると、その人は薄笑いを顔に浮かべていなくなった。

暫く呆然としていたけど、サルサの”お散歩コール”で我に戻って、嫌々ながら散歩に行くことにした。

「あんた、岩瀬タケト？」

後ろから俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると、そこには中性的な顔立ちの子供が立っていた。そして、もう1度俺の名前を呼ぶ。

「ねえ！違うの？」

「え？ ああ、そう・・・だけど？」

「あっそ。じゃ、そいつが『サルサ』だね？」

そう言って、まじまじとサルサを見つめている。珍しいものを見るような瞳で。

「ボクはレン。能力をなくした獣人族の『サルサ』と『岩瀬タケト』に伝言を預かって来た。ボクの主人が、元に戻る方法を教えてくれるってさ」

今、なんて？

元に戻る方法・・・！？

俺もサルサも目を丸くした。なんてったって、サルサが元に戻る！！

レンとかって名乗ってた子供は、俺達を呆れた様子で見てる。

「ほ、本当に・・・？ 元に・・・戻れる・・・の？」

「そう！ ボクに付いて来なよ。主人が待ってる」

そう言っでレン君（？）は元の姿に——狐のような姿に戻った。

小さくて、大きな耳が特徴的な動物・・・近頃流行り始めたフェネックとかいう動物だろう。

ヨチヨチと歩くレン君を抱き抱えて、案内されるまま歩いて行った。話を聞くだけでも・・・と思い、サルサの散歩の変わりに――と踏み出した1歩だった。

思い返すとこれが、始まりだった――。

【SIDE・アル】

さて、顔も見たしバレてる様子も無いしな・・・。少しおちよくりにでも・・・って、なんだアイツ？『匂い』が分からないってことは、獣人族か・・・。――にしても、なんだ？元に戻る方法だと？

怪しい。怪しすぎる。

って！タケト、なんで付いて行くんだよ！！

相変わらず単純な奴……。いい話には裏があるっていう格言をしらんのか。

くくくっ！！

き・に・な・るくく！

気にしたくないが、サルサはあの調子だし、タケトは単純だし・・。

ダアッ！

しょうがない。付いて行くとするか・・。

【SIDE・OUT】

一見、ペットの散歩にも見える姿。タケトはレンを抱き、案内されるまま歩く。

その隣にサルサ。

そのずっと遠くにアルがいる。

「まだ着かないの？」

「もう、すぐそこ。ほら、ココだよ」

そう言ってレンの示す方向には、でっかい屋敷が・・・。

『でっか!!!!』

「?」

タケトは後ろを振り向く。身を潜め、アルは口を塞ぐ。

「どうしたのさ? 早く行きなよ」

「え? ああ、うん」

タケトは向き直り、屋敷へと足を運んだ。

【SIDE・タケット】

レン君の言われた通りに歩くと大広間へと辿り着いた。そこには大きな赤い1人用の椅子。

暖炉の火がパチパチと火花をあげて、屋敷とレン君の主人だと名乗る男の子の人がいた。

真っ黒の髪に、真っ黒の瞳で俺とサルサを眺めているみたいだ。

「初めまして。私はバロン、日本人だが・・・本名は伏せさせてもらうよ」

「サルサを・・・元に戻すって・・・？」

主人が名乗った直後、俺は唐突に質問した。バロンさんの本名なんて今はどうでもよかった。

早く・・・早く知りたい。サルサとまた、話がしたい！

俺の質問に答えるように、小さなビンを差し出している。それを手に取り、まじまじと見つめてビンの蓋を開けてみる。

ふうわりと漂う甘い香り。

その臭いは、サルサの鼻腔をくすぐったらしく……。

「臭っ!!?」

と、声が――――

声が……?

したよね? 今……!

「サルサ!」

「タケト? 俺は……話しているのか?」

している! ちゃんとしてるよ!!

言葉にしたい気持ちは大き過ぎて、ただ首を振ることしかできなかった。

10年ぶりの親友の声。昔とまるで変わっていない。
懐かしい気持ちと、嬉しい気持ちが一気に俺の瞳を涙で一杯にした。

【SIDE・アル】

広い屋敷だが、殺風景とはあまり違う。暖炉の火が燃える音と、タケット達の声しか聞こえない。

最近まで空き家だったらしい。その証拠に、廊下にはまだ埃が残っている。

バロンとか言ってたな・・・。

あいつ、なんのつもりだ？元に戻る方法なら、何故他人に教える必要がある？オレなら独り占めにして、ずっと黙っているぞ？

それに・・・この香りは――？

これは、調べる必要があるようだ。

あの瓶の中身も、あのバロンって奴も、臭いやがるぜ・・・。

――一週間後――

あれから一週間。

やはり、タケット達は変わっていない。急に能力が戻ったサルサに疑念を持った銀星が訪ねて来た。

ははは・・・。

やっぱ、気付くわな……。あれだけ喋るようになれば。
もうそろそろ来る頃だろう。

ん？何するかって？

勿論、仕事だよ。し・ご・と。

銀星も付いて行くらしいからな。今、待ち合わせ中。
お！噂をすればなんとやら。

「すまん、カオルを説得するのに時間が掛かった」

「気にすんな。じゃ、行くか」

「行く”って、どこに行くつもりだ？」

銀星の姿を見るなり、足を運ぶといきなり止められた。
まだ言ってなかったな……。そういえば……。

2の話：始まり↓展開（後書き）

では、次回お会いしましょう

3の話：展開↓疑惑（前書き）

皆さん、お久しぶりです！

さあ、そろそ

ろネタの限界に突入してしまいそうですが・・・（Tw、）

タケトとサルサ、アルテミス（キール）
と銀星 そして、あの『匂い』の正体とは・・・！！

3の話：展開↓疑惑

謎の人物・バロンによって、獣人族としての能力を取り戻したサルサ。だが、それに疑念を抱いたアルは銀星と共に情報を集めることにしたのであった・・・。

【SIDE・アル】

取り敢えず、サルサの能力が戻った事態を銀星にそのまま伝えることにした。

どーせ、隠したってすぐバレるし・・・隠すことも無いし・・・。

ま、それで納得してくれたんだが・・・。

「先ずは”聴き込み”だな。あの屋敷付近に在住してる奴等から情報を貰わないと話にならない」

「オレの仕事取るなよな」

そんなことを話しながらオレ達は歩いて行った。

「屋敷付近」

やっぱり、アイツ等はここ最近現れたらしい。この場所に巣を創

つてずっと生活していた鳥達から聴いた情報だ。
人気の無いこの場所は、鳥達にとって穴場とも言える絶好の場所
だったらしい。

『あの・・・』

その声は、オレ達の後ろから聞こえた。

そこには小さな犬の子供が尻尾を股の下に入れて、明らかに怯えた様子で座っていた。

『ぼく、あのひとたちがいつきたのかしってましゅ』

辺りに母親の姿は見えない。子犬はまだ喋り慣れていない様子で、オレ達に声を掛けてきた。

恐らく、この子犬の母親は・・・アイツ等に・・・。

「お前、母親は？」

オレの質問に、子犬は肩を竦めた。

隠そうとしていた”匂い”が一気に溢れ出す。

・・・なるほど。そーくるか。

「銀。子犬、コイツ見ていてくれ」

「それは構わないが・・・。どうするつもりだ？」

「本人達に聞いて来る」

おー、おー。

そんなに目を見開いちゃってまあ……。

眉間に皺よせんって。跡になるぞ……。

オレの心配など気にもしていない様子で、説教垂れていた銀星も、子犬の”匂い”に気が付いたようだ。

わざわざ子犬を使って、情報をくれるってことは……もう、バレてる可能性が高い。

なら、こちらから出向いてやろうじゃないかってハナシ。

「……気を付けろよ」

散々、説教しておいてそれだけかよ。

そんなことを考えながら、屋敷へと足を踏み出した。

【SIDE・OUT】

「初めまして。情報屋さん」

アルの訪問に、驚きもしなければ唾然ともしない。バロンは含み笑いの後に、アルを『情報屋』と呼んだ。

自己紹介は既に済ましている。

バロンはアルの本当の正体は知らないようだ。

レンも、未だ未熟だからかアルの”匂い”にも気が付いていない。アルにとっては好都合である。

「で、ご用件を伺いましょうか？」

バロンは早速、話の本題に移った。

回りくどいことが嫌いなアルは助かった。どうやら、2人の性格はにているらしい。

「今から少し前、あんたはある青年に小瓶を渡しただろ？アレ、オレにもくれ」

アルの口から出た『小瓶』というフレーズに、身体がピクリと反応する。

だが、慌てる様子も無く冷静に答えを短く口にした。

「ええ、まあ」

「くれ」

「それは出来ません」

アルはあからさまに嫌そうな顔をした。

バロンはもう一度、冷静な口調で断った。

「じゃあ、教えてくれ。アレは何だ？」

「活力剤ですよ。見た所、貴方は大丈夫そうだ……必要性がありませんよ」

「犬用のか？」

アルは意地悪く嘲笑いながらバロンに問いかけた。

一応は獣人族の端くれ。人間の”匂い”なら、この10年で嗅ぎ分けることくらい簡単になった。

表情には出していないが、あれを隠そうとしているのがバレバレなのだ。

「アルテミスさん。私はこれから仕事がありましてね……。申し訳ないのですが――」

「あいよ。じゃあ、失礼」

居心地が悪くなったのだろう。バロンは席を立ち、背を向けた。

アルも背を向け、ドアノブに手を掛ける。そして、一言、背を向けたまま言った。

「外の子犬の親、さっさと解放^{はな}してやれよ？」

そのまま、アルは部屋を出て行った。

【SIDE・アル】

確かに・・・バレてたな。

オレが情報屋ってことだけだったが、あのバロンとかって野郎！
あんな嫌な”匂い”は初めてだ！！

こりゃあ・・・また、面倒なことになりそおだ（汗）。

「アル。どうだった？！」

背後から駆け寄って来た銀星に、取り敢えずの説明と今後の行動

の予定を話しておいた。

そろそろ、太陽が真上にくる。

オレは全身を黒で包み、一度銀星と別れた。ここからはオレの仕事だ。

銀星には、タケット達の監視を頼んだ。

さあ！ いっちょ、本気を出してやろーじゃねえか！！

【SIDE・タケット】

「はあ」

今、すつごく幸せだなあ。

なんて思う今日この頃。

「タ、タケット。すまぬ、アレを・・・」

今、一つ心配なことがあるとすれば、最近のサルサだ。

あの小瓶の中の臭いを嗅ぐ回数が増えて来ていることだ。

銀星にも相談してみたんだけど、次の日にはあの時の黒い服の人が家に忍び込んだし・・・。

もしかして!!

あの時に、瓶の中に何か盛られたんじゃない??

そうだよ! その頃からサルサの様子がおかしくなった!

あの人が怪しい。

あの人は最初から怪しかった!!

「サルサ。バロンさんの所に行こう! 助けてもらおう!」

「と、いうわけで・・・」

「なるほど・・・。それで私の所に?」

黙って頷くと、バロンさんはため息を漏らした。

落ち付かない様子でフロアを歩き回っている。

もう一つ、ため息を漏らして足を止める。そして、俺達に背中を向けた。

ここは、例の屋敷。

来てみたものの……。取り敢えず、俺達の身の回りの最近の出来事を話しておいた。

そして、この反応。

何かあったのかもしれない。

「……え？」

バロンさんの言葉に、思わず聞き返してしまった。

「つい先日、ここにも来たよ。岩瀬タケト君、彼のことを何か知っているかい？」

来た……。？この屋敷に……。？
一体、何をしに？

「いいえ、知りません」

「彼の名前は『アルテミス・きら・夜王』。自らを『情報屋』と呼んでいた」

情報屋……。

「彼は、君達のことを調べている」

「!？」

「一応、隠しておいたが……。気付かれたかもしれない」

やっぱり、そうだったのか。

彼は俺達……。獣人族のことを調べ廻っているに違いない。

そっちがその気なら……。

「 Baron さん。俺達は闘います」

【SIDE・アル】

銀星に聞いた所によると、ここにあるはず……。っと、あった。

いつ嗅いでも嫌な”匂い”だ。

タケトとサルサには悪いが、数滴もらっておこう。

トン、トン、トン、トン……。

一定のリズム。

刻まれる足音。オレがそれに気が付いたのは、部屋の前で足音が止まった瞬間だった。

慌てて身を隠しながら部屋を出たが……。

見つかったかもしれんなく。

因みにここは、動物園。

数倍に薄めたあの液体の実験のために来た。

勝手な話だな……。

オレの都合で、動物達で実験しようだなんてな。

だが、その必要も無いらしい。

既に、実験の結果が見えているからだ。

オレがここに来てまだ一分もしないというのに、その種類の動物だけが反応しているのだ。

狐、狸、そして狼。

どれも、犬科の動物ばかりだ。やはり、この液体は犬に関連があると考えて間違いないだろう。

あとは、この液体の正体だな。

キキーーーーッ!!

ドンッ!!!

動物園から離れた商店街付近。その”匂い”はすぐに現れた。車通りの多いこちらではよくあることだ。

また、不運な事故で動物の小さな命が潰える。

その瞬間だった。

『生きたい』『死にたくない』という『生』への執着心。

『もし・・・』『こうしておけば』という『過去』への羞恥心。

『こいつさえいなければ』『憎い!』という『彼の者』への憎しみ。

それらが全て混じり、嫌な”匂い”を発する。

小瓶の中の”匂い”とほぼ同じ。

「ヤバイ・・・!」

そう、ヤバイ。

タケトがサルサに与えているのは、犬達の『憎悪』。『生』への執着心が勝っているから、サルサの能力が復活したのだ。そして、あれは長く続かない。使用すれば抗体が出来る。抗体が出来る、以前の使用量、回数が増える。要は、麻薬等と同じ仕組みだ。早くなんとかしなければ・・・。

【SIDE・タケト】

「タケト。本当に闘うつもりか？俺は構わんが・・・お前はそれでいいのか？」

「いいんだ！俺達の邪魔はさせない」

「・・・」

闘う決意の後から、サルサはそれしか言わない。俺だって強くなつたつもりだ。

子供じゃないんだ！

多分、サルサも分かってる・・・。

俺のことが心配なだけなんだと思う。

「心配しないでよ。俺なら、大丈夫だからさ」

今出来るだけのとびっきりの笑顔を見せてみる。
サルサは薄笑いで返した。

運命の瞬間はすぐそこまで来ていた。

3の話：展開↓疑惑（後書き）

感想・評価

お待ちしております

4の話：疑惑↓結末（前書き）

今回が最終回となります 長いようで短い間、愛読して頂き有り難
うございましたm () m

4の話：疑惑↓結末

『時』とは短いもの

『時』とは長いもの

『時』とは逆らえないもの

『時』を越えた世界

私はそれを見てみたい

「どうした？歌なんか唄ってた。」

真夜中の寒空の下で、銀色の獣人族は漆黒の羽根の主に問いかけた。

満月がよく似合うその主は、”別に・・・”と素っ気なく返事をする。

この月が沈み、太陽が昇ればいよいよ始まる。

かつて、一緒に闘った仲間と拳を交える『時』が近付いて来る。

銀色の獣人族・銀星は、漆黒の羽根の主・アルテミスに着くことを決意した。

「銀。オレが逝ったら――」

「馬鹿言うな。お前がそんな簡単に逝く訳ないだろ」

「・・・」

アルテミスは首を振り、やれやれ、と漏らした。

二人は朝までそうやって過ごした。

曇り空の下、役者は揃った。

タケト、サルサ、バロン、レン、アルテミス、銀星。

「なんの用だ？ アンタに呼ばれて来たが・・・『依頼』じゃあなさそうだな」

アルテミスはいつものように黒一色に身を包んでいる。
その隣にいる銀星を見つめて、タケトは息を飲んだ。

タケト

（なんで、あっちに銀星がいるんだよ。銀星も仲間なの・・・？）

タケトの考えなど、筒抜けの状態だった。ただでさえ単純だというのに、タケトとバロン以外は獣人族（又は、ハーフ）だからである。

「お前、単純すぎ。いい加減に気付けよ・・・。その男に騙されてるって」

痺れを切らしたアルは真実を口にした。今まで集めた情報、そして確信に至った。

バロンの計画。

それは、犬達を配下にあること。

おそらく、サルサは調度いい実験材料として利用されたのであるう。

バロンが最終的に計画していたのは――――

「――世界統一を成し遂げること」

淡々と語るアルを遮り、今までに無かった冷酷な口調は誰でもなく、バロンからのものだった。

「私は『人間』という生物が嫌いでした。世界の生物が皆、動物なら・・・と考えたのですよ」

「その初めの実験台が・・・」

「ええ、情報屋さん。彼達ですよ」

「 Baron は ” ニィ・・・ ” と笑う。冷たく、笑っていない笑み。そして、命じた。」

サルサに――――

「そいつを殺せ！計画を知ったものを生かしておくな！！」

サルサは抵抗した。だが、それも初めのうちだけだった。今まで使ってきたあの ” 匂い ” を作り上げた者が命じたのだ。

そう簡単に打ち破れる筈も無い。

「あああああ！！！！」

サルサの身体が変化する。

犬型から獣人型に。

「驚きましたか？情報屋さん。彼は人を越え、動物をも超えた存在――――」

「――それがどうした？」

「・・・貴方の隣にいるその犬が教えたのですね？」

アルテミスは首を横に振る。そして、なにやらいそいそと動き始めた。

「どうやら、気に入っている帽子や上着、眼帯などの身に付けてい

る物を外しているようだ。

「・・・ふんっ！」

地面に足の裏をしっかりと着け、腹に力を入れた息を漏らす。

そこには、銀色と紫色の瞳の獣人族がいた。

漆黒の身体、漆黒の羽根・・・。タケトは知っている。ずっと前、同じ獣人族がいたことを。

だが、その者はもう存在していないと思っていた。

銀星が看取ったはず、とタケトは混乱していた。

「オレの名は『アルテミス・きら・夜王』。バレると厄介だったんでな、偽名を使わせてもらった」

そこまでは、少し変わった自己紹介。そして、アルは爆弾発言を始める。

「本当の名は『月神キール』。コウモリの獣人族と人間の間に生まれたハーフだ」

「!?!?!?!」

バロンは目を見開いた。今まで、獣人族と人間のハーフなど見たことも聞いたこともなかったからである。

アル・・・いや、キールはまず、自分の腕を傷着けた。

血管を切ったらしい。濁りのない鮮血が、噴水のように吹き出した。

だが、吹き出した鮮血はいくら経っても地面に落ちることはなく、宙に浮いて球の型を保っている。

その間、キールの傷口は塞がっている。

血の球体はキールの意志だけでウネウネと動く。
そう。

これが、キールの能力。血液を操るという能力である。

「・・・はあ、はあ。タケト。バロンの言うことなんか信じるな・
・。オレ・・・のっ！・・・っがあ！！」

「キール！！もういい、無理するな。このままだと・・・お前はっ
！！」

獣人型の銀星が慌てて声を荒げる。見ただけで分かるからだ。キールの命が尽きかけているということを・・・。

獣人型になっただけでこの状況だ。だが、キールは笑っていた。
これが最期だと、分かっていた。

ずっと前から・・・。

この町に辿り着いた時から・・・。

過去を振り返っている間にも、我を失ったサルサは牙を向けて来る。
る。

それも――

――見境無しに。

つまり、タケトも・・・である。

サルサにそんな意識は無い。恐らく、あの液体のせい・・・。

”待て”を掛けるタケトの声すら届いていない。

誰かが身体的に止めるしかない。

誰が？

「オレが止めてやる。……って言ったら、お前は手伝うんだろ？
銀星」

月灯りが似合う、紫色の獣人族？

それとも――――

「当たり前だ」

月灯りに照らされた、銀色の獣人族？

―――否。

両方だ。

『うおおおっ！！！！！！！！！』

「前にもあったな……。こんな感じ。……。ははは」

髪を染めて、カラーコンタクトをして、変装して……。

『自分』という存在をなくして、結局——バレて存在が復活して、再び消えようとしている。

狂気していたサルサと牙を交え、爪を交えた。

あの液体の効果がなくなるまで、獣人族の姿のままです。

「ははは、じゃないだろ？」

半ば呆れた様子で銀星は呟いた。

ゆっくりと起き上がるキールに、皆はハラハラする。

が、すんなりと立ち上がるキールに皆は啞然とした。

腰を鳴らし、首を鳴らし、肩を回すキールのその姿はまるでオヤジ。

最後に、ポンポン、と足の埃を払って歩き始める。

「ちょ、ちよつと！月神君？」

「ん？」

「もう、行くの？」

「ああ」

短いやり取り。

でも、少し寂しげな会話。

半分人間のキールの”匂い”は、銀星達に見破られていた。だが、銀星達はそれを口にしない。

それも”匂い”で分かっていたからだ。

サルサはこれからが大変になるだろう、と告げてキールは翔びたつた。

タケトは、キールの消えていく後ろ姿を眺めて誓う。

二度と同じ過ちを繰り返さないと。

サルサが元に戻るまで、自分だけを信じると。

同じく、キールの後ろ姿を眺めて銀星も誓う。

今度こそ、タケト達を正しい道に導くと。

最後に、サルサも誓う。

必ず、元に戻ると。

バロンのしたこと、己のしたことを忘れないと。

そして、劇の幕は降りた。
それが、喜劇なのか悲劇なのか。
それを決めるのは貴方次第・・・。

人にはあまり知らされてない、ある山荘。

その脇には墓があるのを、貴方は知っていますか？

知っている人は、その墓に彼の好きだった花を供えてあげて下さい。

漆黒の羽根を持った、紫色の戦士に――――

F
i
n

4の話：疑惑↓結末（後書き）

終わってしまいました。なんか、最後のほう適當だったような・

・（□；） まあ、キールは優しいの

で、パンチ一発で許してくれるでしょう（／＼！；） では！

また、お会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5403d/>

銀色と紫色

2010年10月9日04時26分発行